

テレビ・オーディエンスとしての男性

— 山口県南東部地域での男性の生活史からの接近

国 広 陽 子

テレビ放送開始から半世紀以上が経過し、内容分析による番組のジェンダー分析や視聴者としての女性に関する研究は進んできたが、視聴者としての男性についての研究はまだ少ない。テレビ視聴では、女性の視聴時間が男性より長く、女性はドラマをより好み、男性はスポーツ番組をよく見るという特徴があり、この傾向には大きな変化がない。ではなぜそうなのか。テレビ・オーディエンスがジェンダーによって構造化されてきた要因を主に男性が語る生活史からアプローチした。対象は、61歳以上の山口県南東部地方出身者である。

聴き取り調査からは、「テレビは見たくない、見ない」という語りが「テレビに依存してはならない」という規範に基づくこと、この規範と性別分業による生活時間の配分によって現実に「テレビはおんな・子どものもの」として構造化されたこと、その背景には男性たちが娯楽・快楽をテレビよりも飲酒や麻雀などの男同士での連帯に求めてきた生活史があることが浮かび上がった。

キーワード：テレビ・オーディエンス、テレビ視聴のジェンダー・ギャップ、生活史、テレビ・ドラマ

はじめに — 問題の設定

日本で一般向けテレビ放送が開始された1953（昭和28）年2月から56年が経過した。当初の放送時間は短く、テレビ受像機は高価で⁽¹⁾、視聴できたのは東京地域のみで、このときの受像機普及は866台だった。同年8月に開局したNTV（東京）は、街頭テレビ220台を設置しテレビの普及を図った。翌1954年にはNHK大阪・名古屋が開局し全国にテレビ電波が広がる。RKB（福岡）ほか民間放送12局が開局した1956（昭和31）年には、NHKの受信契約数も100万件へと伸びた。家庭へのテレビ普及を飛躍的に伸ばす契機となったのは、1959（昭和34）年の皇太子の結婚パレード中継、1964（昭和39）年の東京オリンピックといったメディア・イベントだった。1969（昭和44）年に普及率は90%を超えた（伊豫田他1998） — これがテレビ普及をめぐる全国レベルでの俯瞰的な物語である。そして現在60歳前後に達した「団塊の世代」⁽²⁾は、テレビ普及と共に育ったとみなされている⁽³⁾。ただしいつ、どのようにテレビを見始め、いかに楽しんできたかには、同世代でも育った地域（農村部・都市部など）やジェンダーによる違いがあるだろう⁽⁴⁾。

「男は稼ぎ手サラリーマン、女は主婦」という形のジェンダー分業体制成立は戦後の高度経済成長期 — 1955（昭和30）年から1973年の石油危機まで — と重なる。女性を家族・地域ケアの担い手として主婦化するジェンダー体制が都市化と並行して進行し確立したこの時期に、テレビは全国に普及し定着した。それゆえこの時期のテレビ番組はさまざまな点で当時のジェンダー体制をうつす鏡になっていた。こうしたテレビの歴史的拘束性を踏まえ、テレビ番組（コマーシャルを含む）の内容分析によって、放送内容におけるジェンダー・ステレオタイプ（性役割の固定化、女性の性的対象物化、ジェンダー分業の自明視）を明らかにし、批判する研究が蓄積されてきた（井上 2009 p.1-36）。それらは「テレビは誰にもよく見られており、人々はテレビに強い影響を受ける」という前提で、影響されやすいオーディエンスを前提にしていた。

一方、こうした研究は番組をテキストととらえるカルチュラル・スタディーズにより批判を受けた。オーディエンスが、置かれた社会的文脈（階級・ジェンダー・エスニシティ）によって、ヘゲモニックなコードを含む番組をいかに読むかを重視すること、メディアが文化実践の場であり、ジェンダーを構築する現場でもあるという視点が求められた。河津孝宏（2009,2008）は、モーレーらのカルチュラル・スタディーズにおけるオーディエンス・エスノグラフィーをさらに批判的にのりこえ、オーディエンスの生活世界における文化実践として若い女性を中心に人気があったアメリカのドラマ「セックスアンドザシティ」視聴を包括

的に分析し、この番組を視聴するという文化実践がもつオーディエンス女性にとっての「意味」に接近している。

そもそも女性学が誕生したのは諸研究における人間像が男性によって代表され、女性が「みえない存在」だったことによる。ジェンダーの視点によるメディア研究も、主に女性に焦点を当ててきた。その結果、女性オーディエンスのメディア実践はかなり「みえやすく」なった。ところが日本でも女性学・フェミニズム研究の影響を受けて男性学が生まれ、男性性の問い直しがなされ、男性誌など活字メディアを取り上げる研究、映画研究などがあるが、男性に焦点をあてたテレビ研究は少ない（瀬尾2001など）。男性はどのようにテレビを見てきたのだろうか。

筆者は1990年代後半から山口県南東部地域でのフィールド調査を行い、ケア・ワークに従事する女性を主な対象として聞き取りを続けてきた。そして超高齢化・過疎化が急速に進む地域でケアされる側の存在として増えつつある高齢男性に目を向けるようになった。身体機能が弱る高齢期には娯楽メディアとしてのテレビの重要性が増すと思われたが、テレビをさほど楽しんでいる様子のない男性もいた。明らかに同年代の女性と男性のテレビに対する姿勢に相違がみられたのである。

本稿ではジェンダーの視点からオーディエンスとしての男性に注目し、そもそも男性たちがテレビをどのように視聴した、あるいは視聴しなかったか、それはなぜか、自らそれをどう解釈しているのかなどを地方生活者と地方出身者に目を向けて探っていく。生まれたときからテレビがあったのではなく、生活の中に新しいメディアとしてテレビを受け入れた経験を持ち、テレビについて意識化して語りやすいと推測される団塊世代以上を研究対象とし、彼らのテレビとの関係性を経済成長期とそれに続く時期における諸個人の文化実践として生活史のなかでとらえたい。当該地域での聞き取り調査に加え、筆者も加わっている研究プロジェクトが2009年に実施したテレビと記憶をめぐる全国調査⁵⁾データも利用しつつ、テレビ・オーディエンスとしての男性たちのテレビとかかわりを考察する。

1. テレビ視聴のジェンダー・ギャップ — 変わらない「女はドラマ、男はスポーツ」

まず先行研究からテレビ視聴のジェンダー・ギャップを確認する。村松泰子(1983)は、テレビ放送30年の時点で「テレビは、おんな、子ども向け」といわれてきたことにたいし、「女性たちは、ほんとうにテレビが好きなのだろうか」と問い、女性のテレビの見方の特徴と女性にとってのテレビの意味を検討した

(村松1983 p246-67)。さまざまな調査データから読み取ったテレビ視聴における女性の特徴は、1.報道・娯楽・知識の獲得いずれの面でも新聞よりテレビを重視する傾向、2.長い視聴時間、3.「ながら」視聴が多く（50%以上）、専念視聴はむしろ少ない、4.家族とのつきあい視聴が多く、テレビで何を見るかだけでなく、家族と共に見る団らん重視、5.ドラマ好き（男性はスポーツ番組好き）、である。

以上の特徴を検討するにあたって村松は、女性が男性よりも「テレビを、自分の身近な生活に役立つ実用的な情報源とみなし、また、そういう道具として位置づけている」点を重視した。女性はドラマの筋の展開を楽しみ、登場人物と同一化するだけでなく、ドラマからも「生活に役立つようななにかをくみとろう」とし、自分の生き方の参考になることを学ぼうとしている。また1980年代初頭の時点ですでに、女性のテレビへの興味が減少傾向にあり、連続ドラマの視聴率が低下し、完結型の2時間ドラマが好調であることに着目して、その背景に女性の高学歴化や社会進出があると示唆した。女性の社会進出がテレビ依存度を低め、「それしかないものとしてのテレビから、女性たちがみずから選ぶ選択肢の一つとしてのテレビへと変わっていくかもしれない」と解釈をしている。女性が家族内存在でなくなる、つまりジェンダー規範による生活時間の拘束が弱まり、テレビ・オーディエンスとして個人化すれば、ジェンダー・ギャップが減少すると予想したのである。

有配偶者女性の無職（専業主婦）割合は1975年にはピークに達し、その後はパートタイマーなど非正規雇用ではあるものの、雇用労働者化が進んだ。女性の社会参加はその後進み、2008年には「男性雇用者と無業の妻」世帯825万世帯に対し、「雇用者の共働き」世帯1011万世帯となっている（内閣府2009 p.21）。では女性のホームドラマ好きやテレビの価値づけや生活における意味は男性に近づき、ジェンダー・ギャップは少なくなっただろうか。

村松の研究から20年後の2000年代初頭に性別・年齢別テレビ視聴の特徴をまとめた白石信子（2003）によると、ライフステージに応じた興味関心の相違がテレビ視聴や番組選好の相違を生むとはいえ、女性の視聴時間が男性より長く、「女性はドラマ好き、男性はスポーツ好き」という傾向はなお続いている。萩原滋らの調査（2009）によって、さらに詳しくみると、「テレビ親近感」「テレビ話題度」「テレビ視聴頻度」「テレビ視聴時間」のいずれでも女性の数値は男性に比べて有意に高く、逆に、「新聞閲読頻度」「雑誌閲読頻度」「ラジオ聴取頻度」「インターネット利用頻度」では男性の数値が有意に高い。これは、村松（1983）の1.2.と合致する。また「ながら視聴度」も女>男が有意である（同3.と合致）。ただし「一人で見るか、だれかといっしょにみるか」に関しては有意な差がなく（男女ともに「一人で見る」が4割弱）、「一緒に見たい」も男女とも1割

強にとどまっており、テレビ視聴の個人単位化が進んだことを示す。村松が「付き合い視聴」する存在として描きだした女性の姿はない。番組選好については、「よく見る番組ジャンル」（調査において「よく見る」と答えた比率）は図の通りである（図1参照）。

男女双方でもっともよく見られている「ニュース・報道」のほか、「お笑い・演芸」「バラエティ」「アニメ・マンガ」「旅行・紀行」「講座」「ドキュメンタリー・社会派」それぞれの番組ジャンルでは男女に有意な差はない。男性より10パーセント以上、女性がより多く見ているのが「ワイドショー」「生活情報・実用」「ドラマ」「料理・グルメ」「歌・音楽」である。

これらのデータからは、男性は生活者として細かな生活に関与しておらず、生活情報を必要としないジェンダー分業型ライフスタイルがテレビ視聴に反映していることが読み取れる。

ジェンダー平等に関する全国意識調査における変化（「子どもに受けさせたい教育程度」における男女差の減少、「男は仕事・女は家庭」に同意しない回答の増加など）とは裏腹に、日本におけるジェンダー分業の実態面での変化は滞っている。女性の被雇用者は増加したが、その多くは非正規雇用であり、女性は家族責任を負ったまま、労働市場に参入している。女性にとって職業をもっていることと主婦的存在（家族のケア役割の責任者）であることは排他的ではなく、正規雇用者であっても家事・育児・介護の主要な担い手である（落合2008）。女性の社会参加が進んでも、女性が身近なテレビから生活情報を得る必要があることに変わりはない。

男女間で有意差がある番組ジャンルの大半が女性>男性であるなかで、唯一の例外が「スポーツ」であり、その差は30%近くも開いている（女19.2% < 男47.6%）。「ドラマ」は、女性62.8%、男性40.1%と20%を超える差である。結局「女はドラマ、男はスポーツ」という状況も変わっていない。よくみる番組ジャンルは世代ごとの差があり、ドラマ・スポーツについても年代差があるが、ドラマの場合どの年代でも女>男、スポーツの場合は男>女である（図2参照）。

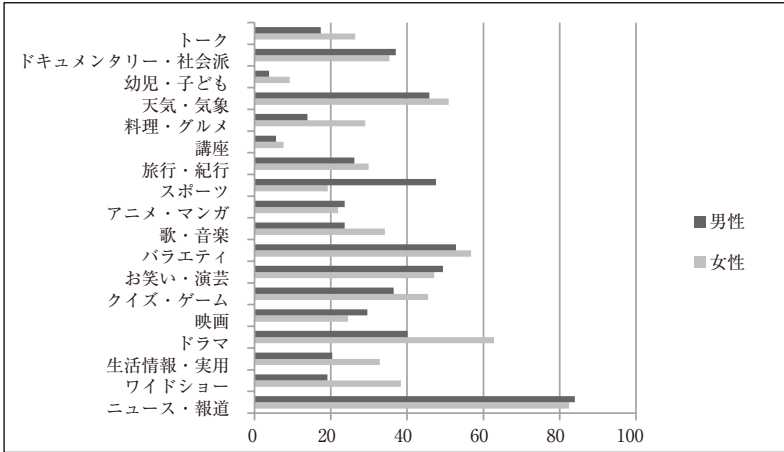


図1 よく見る番組ジャンル (男女別) %

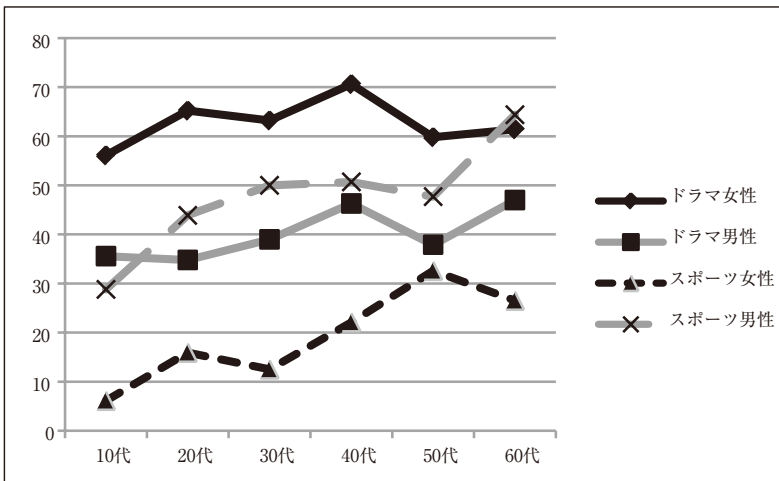


図2 よく見る番組ジャンル (男女別 スポーツ・ドラマ) %

2. テレビをめぐる男性たちの語り

女性のドラマ好きの要因としては、放送局側が消費者としての女性にターゲットをあて、女性の興味関心をひくドラマ制作をしてきたことであろう。それがますます女性をドラマ好きにし、男性をドラマから引き離れた可能性がある。またテレビ以前から体育・スポーツは男性性と結びつき男性優位を正当化する文化装

置として利用されてきた（関口2001）。スポーツ番組が男性のテレビ娯楽で中心的位置を占めてきたのは、スポーツそのものがジェンダー化され、テレビもそれを踏襲して番組化したためであろう。

以下では、女性がなぜテレビをよく見、ドラマを好むのかという視点からではなく、男性がなぜテレビをより軽視し、またドラマをあまり見ない・見なかったのかに焦点をあてる。「女はドラマ、男はスポーツ」というオーディエンスの構造化はジェンダー秩序の一部であり、オーディエンスは実践を通じてこの構造を支えてもいる。「男はテレビを女ほど好まず、ドラマを見ない」というジェンダー・ギャップの継続はその現れである。いかにしてこの構造が維持されるのか、あるいは揺らぐのか、男性たちのテレビ娯楽をめぐる語りから見ていこう。

2-1 調査概要⁶⁾

調査名：テレビと生活史

調査主体：テレビ番組研究会（国広陽子，大坪寛子）

調査時期：2008-2009年

調査地：山口県大島郡周防大島町・山口県柳井市

調査方法：グループ・インタビューと個人インタビュー

調査対象：60歳代から80歳代の男女。調査地に生まれ育ち現在も居住している人と、学校や仕事の関係で現在は首都圏に住んでいて、親の介護などで頻繁に同地に帰っている人。山口県立Y高校卒業生のネットワークにより協力者を求めた。周防大島町在住の高齢者については、NPO法人「周防大島ふるさとづくり のん太の会」の協力を得た。

グループ・インタビュー

① 周防大島町でのインタビュー

地元で長く住む60歳代から80歳代前半の高齢男性7名と、周防大島町出身で定年退職や親の介護のためふるさとにUターンした60歳代、70歳代の男性5名の計12名を対象に、2009年5月、7月、8月に過去のテレビ番組を共同視聴した後、2グループに分かれてそれぞれ約1時間程度のインタビューを実施した。12名のうち、3回とも参加したのは5名、2回参加が3名、1回のみ参加が4名である。

② 柳井市でのインタビュー

参加者は柳井市の不動産会社経営者女性（61歳）を含む計8名。年齢は50歳代後半から60歳代にかけての人を中心に、30-40歳代も含む女性4名、男性4名の計8名。

2008年12月実施。

両地域共に、グループ・インタビュー参加者はAKさんというようにイニシャルで示す。

個人インタビュー

表1 調査対象者の概要

	性別	年齢・世代	出身・現在の住所	現役時の職業	家族状況
Aさん	男性	82歳 戦争世代	周防大島町・同在住	小学校教員・ 兼業農家	妻が入院一人暮らし
Bさん	男性	82歳 戦争世代	周防大島町・同在住	郵便局員	妻と同居
Cさん	男性	67歳 第1戦後世代	周防大島町・首都圏 からUターンして同 町在住	会社勤務 (役員)	母・妻と同居
Dさん	男性	61歳 団塊世代	柳井市大島町・首都 圏在住	会社役員	妻・子ども2人。 母が県内福祉施設に いるので頻繁に帰郷
Eさん	男性	61歳 団塊世代	周防大島町・首都圏 在住	団体職員	妻と同居。母は入院。 父の介護のため頻繁 に帰郷
Xさん	女性	75歳 第1戦後世代	周防大島町・同在住	主婦	夫を亡くし一人暮らし
Yさん	女性	61歳 団塊世代	柳井市・首都圏在住	主婦	夫を亡くし子どもと 同居。母の世話のため 頻繁に帰郷

(1時間半—2時間程度のインタビューを録音し、文字原稿を作成して分析した。本稿では女性Xさん、Yさんについては男性との比較するためのデータとする)

2-2 調査地域の概要

山口県周防大島町は、山口県東南部の瀬戸内海に位置し、淡路島、小豆島に次ぐ広さの屋代島(通称大島。面積138,17平方キロメートル)と有人島5を含む属島30からなる。屋代島へは、山陽本線の岩国駅から30分程度の大島駅で下車し、橋で渡ることができる。2004年10月に4町(久賀町、大島町、東和町、橘町)が合併して周防大島町が誕生し、人口は20,277人、世帯数10,540世帯(2009年5月1日現在)である。戦後の一時期7万人に達した人口は減少を続けており、年間出生数は78人(08年度)と少なく、高齢化率は46.77%(08年4月現在)となっている。1976年の大島大橋の完成により対岸の大島町と陸続きになったが、それまでは連絡船が通航していた。島の産業としては、温暖な気候を生かした柑橘栽培が盛んであったが、現在の就業者9726人のうち第一次産業従事者28.9%、第二次産業16.9%、第三次産業54.2%となっており、農業従事者の高齢化は著し

い。今回の調査における周防大島町の出身者は、旧大島町（島の西南部に位置し、2004年の4町合併前までの人口7373人）の出身者である。旧大島町は、小松屋代地区・三蒲地区・沖浦地区に分かれ、商店や金融機関、娯楽施設は連絡船の港があった小松屋代地区に集中していた。

柳井市は、本土側にあり、東と北が岩国市と接する人口約3万6000人の都市で江戸時代には商都として栄えた。大島の対岸で本土側にある大島町は2005年に柳井市と合併した。

同地域のテレビ受信等について見てみよう。中国地方では1956（昭和31）年防府市にマイクロウェーブ中継所が完成したことで東京—大阪—広島—福岡の日本縦断マイクロルートがつながりテレビ受信が可能になったが、同年の大島町内のテレビ受信機数は25台であり、対世帯数比では0.7%にすぎなかった（大島町役場 2003 p.513）。1958（昭和33）年のテレビ普及は、小松屋代地区23、三蒲地区13、沖浦地区5、計41台で90戸に1台の割合で1.1%にすぎない。同じ時期に山口県全体では30戸に1台、3.3%の普及率だった（大島町役場1994 p.1063）

NHKの大島中継局が1966（昭和41）年に完成し、UHF方式で大島町の大半をカバーするようになり、1971（昭和46）年にはKRY（山口放送）、TYS（テレビ山口）のテレビ中継局も完成したが、1974（昭和49）年の町政20周年事業で高塔テレビ中継所が立てられるまで沖浦地区には難視聴地区が残っていた（大島町役場2003 p.513）。

2-3 調査結果

(1) テレビ導入初期の共同視聴経験と地域内格差

柳井市で幅広く事業を経営していたAKさん（61歳女性 会社経営）の家には1956（昭和31）年にはすでにテレビがあった。「父親がなんでも新しいもの好きで。商売をしていたから」である。AKさんの自宅には近所の人が大勢見に来ていた。旧大島町ではテレビの初期1955-60（昭和30年代前半）に自宅にテレビがあった人はごく少なく、資産家や現金収入のある商店や開業医、寺などが最初に購入し、大人も子どももそこに行き共同視聴した。当時の大島は農業が中心で現金収入は少なく、経済的余裕はなかった。ただし同じミカン農家でも規模の相違やミカンの植栽時期の相違によって収入にも格差があり、さらに島内の地域格差もあって、それらがテレビ普及の差となった。共同視聴が一般的とはいえ、住まいが山間部にあつてテレビのある家まで見に来られない子どもがおり、またテレビを購入しても島内の電波状況が均等でないため、同じ地域内でも視聴経験に差が生じていた。

●共同視聴

旧大島町小松屋代地区では、テレビのある家や商店に大人も子どもも見に行き、相撲、野球、プロレスのほかアメリカ製ドラマなどを見た。

— (KWさん66歳, 牧畜業)「テレビはよそに見に行っていた。お金持ちのところに」

— (AIさん63歳, 元会社員)「小松にいまはもうないが、電気屋さんがあって、そこに10円持って見に行った」

— (TYさん67歳, 元地方公務員)「子どもも大人も来ていた。床に座って見た。主にプロレス。見ていないと翌日の学校での話題に入れない。もっと山の上のほうにいる子どもは電気店にも来られないので、テレビはみることができない。常にその話題には入れない。相撲をやっているときは相撲で、それがないときはプロレス」

小松屋代地区より島奥の沖浦H地区では一般家庭でのテレビ購入はさらに遅れていたが、都会に出て成功した地区出身者が同地区にテレビを寄贈し、元駐在所の家屋を地域コミュニティが共有する「テレビ会館」と名付け、入場料を徴収し経費に充てて管理運営した。

— (Bさん 82歳)「部落の各家庭にテレビがないから、一回なんぼだったんか、見るんは、1円じゃったか。テレビはH区がつくって、入場料をもらうのは1円じゃったかね」

— (Eさん 61歳)「テレビ会館、駐在所のところ。5円か10円だった。柳井高校が高校野球で全国優勝したじゃない。あれより前」

●購入の動機と時期

Bさんは、沖浦H地区でテレビを購入したのは、寺、歯科医の順だったことを明確に記憶し、自分の購入理由も覚えている。

— (Bさん82歳)「息子がね、保育園行きよったけね。まだ学校いきよらん頃や。テレビを女房が連れて行っちゃ見しよった。G寺、わしも行ったですよ。その時に息子が保育園じゃけ、よその家じゃろうがなんじゃろうが、あらびまわった。こりゃどうにもならんちゅうんで、わしとこテレビ買った。わしね、ゼニがないのをね、月賦でね、柳井からつけた。柳井からテレビ持ってきた。それでね、子どもらが見に来た。うちのまわり子どもらがいっぱいおった。

Bさんのテレビ購入は1958-9(昭和33-4)年と推定される。沖浦H地区内では早い方だった。全国でテレビ普及の契機となった皇太子婚約・結婚の時期と重なっているが、語りにはこのメディア・イベントは登場しない。

小松屋代地区についての語りには、「ご成婚」がテレビ購入の契機になった

様子が登場している。

— (Xさん75歳女性)「あのときにね、(実家の名)の隣のうちにテレビを買われたのよ、それで、ご成婚の、周りの人がみんなどっと見に行つて。だからテレビを買ったのはあの家が最初でしょう」

— (IKさん75歳、元銀行勤務)「昭和34年かな、ご成婚のときおやじにみせてあげようとテレビを買った。自分が27歳のとき。高かった。転勤する23年前で大島にいた。銀行に勤めていた人がいて、その人が預けていた定期預金を担保にして仲間まで5、6人が金を借りて毎月月賦で返した。給料では買えなかった。今で言うとも100万円くらいか」

また当時小学生だったこの地域の団塊世代にとって、テレビ初期のメディア・イベントとして強い印象を残しているのは「ご成婚」より柳井高校の甲子園優勝1958(昭和33)年である。Eさんは柳井高校の全国優勝の際に「テレビ会館」で大勢が興奮して観戦したことをよく覚えているし、柳井市に住んでいたYさん(61歳女性)の家では野球好きの父親が同校の甲子園出場決定を知ってテレビを購入した。

テレビ購入が一気に進んだのは小松屋代地区ではオリンピックの頃である。

— (OKさん75歳、農業)「ご成婚の時は家にはなかった。うちは東京オリンピックのとき」

— (KWさん66歳、牧畜業)「一軒が買うと、たーっとみんなが買いよった。アンテナが立つからすぐわかる。一本立つと、一カ月もせんうちに、みんな」

この地域でそのように一斉にテレビ購入が進んだ理由は、旧大島町でここは比較的経済的にゆとりがあった点、コミュニティ内での付き合いが緊密で同調しやすかった点と、「始末性(節約)もあったが、朝から晩まで仕事をして、金を使う間がない」(OKさん75歳、農業)状態だったからである。

(2) 学生生活・就労生活とテレビ

この地域の男性は語りの中で「テレビを見なかった」ということが多い。それは主として仕事が忙しくテレビを見る時間がなかったという意味であるが、テレビ娯楽やテレビ報道が、自身の日常生活に深く浸透していなかった様子があった。とくに兼業農家の場合は勤め人としての仕事と農作業の両方が重なり、時間がなかったようだ。

●就労スタイルとテレビ視聴

— (Aさん82歳)「テレビは見なかった。忙しくてそんな間がなかった」

— (KWさん80歳、元建設会社勤務)(1963年ケネディ暗殺のニュースについて)「あの頃わしらー忙しいからテレビなんか見ちゃおられん」(インタ

ビューアー「テレビ見なかった?」「あー、見る暇がない」「いや、大体はね、テレビや何じゃというのはあまり見ちゃない。家に帰れば帰ったで農作業、会社行けば会社で残業。忙しい毎日よ。結局ノルマがあるしね」「休みというのは少ないよのう、今のように、日曜が休みって、そんなことはありゃせんよ。今頃の人、あれよ、ありがたいことよ」

- (E Dさん81歳、元教員)「まあその時代はとにかく朝起きたらすぐもう芝刈りに行く、草を刈りに行く、ばらばらで、夕食のときにやっと家族が集まって一息つくときがある、と。そのときはテレビを見る。それ以外は、はい、テレビを見ました、ということはない」

元教員のAさんの場合、次男であるため24歳のときに沖浦H地区の女世帯の婿養子になった。水田と畑とミカン畑があり、小学校教員であるAさんも出勤前後と週末や休暇には農作業をしなければならなかった。現金収入は主に団塊世代の息子2人の教育費に回し東京の私立大学に進学させた。

また宇部市の建設会社に勤務しながら実家の農作業のために頻繁に大島に帰っていたKWさん(80歳)は夜明け前から日没まで働いた様子を「朝星夕星」と表現した。テレビは購入しても本人には見る時間がなく、妻が見ていたという。

ただし戦争世代(1928年以前生まれ)の男性が皆テレビを見なかったわけではない。兼業農家ではなく自営業や勤め人の場合は戦争世代の男性もテレビをよく見ていた様子である。郵便局勤務のBさんは、局舎が自宅と近かったため、昼食は帰宅してテレビを見ながら食べることがあったし、勤め人だったDさんの父親と柳井市で事業をしていたYさんの父親とはテレビをよくみていた。父親のためにテレビを購入したIKさん(75歳、元銀行勤務)は「チャンネル権は親。わたしらは、見た記憶ほとんどない。勤めていて。見ていたのはおやじ」と語っている。

●下宿や寮でのテレビのない生活

第1戦後世代と団塊世代の男性は進学や就職で県外に出ることが多かった。彼らは家を出て都市生活を始めた時期にはテレビのない生活を送っており、テレビを見ていない。

- (Cさん)「(大学生活で)学生はテレビ持ってなかったでしょ。下宿の家庭のなかでテレビを見るということもなかったですね」(就職して東京の社員寮の2人部屋に住んだ)「いやもう、テレビを見る時間がないくらいだったですね。昭和40年から45年まで(誰かと)一緒。その当時は2人部屋というのはいいほうですよ」「寮にテレビがあって、会社から帰ってその前にいるのが3分の1くらい、残りの3分の2はいなかったですね」

第1戦後世代のCさんは、昭和33（1958）年に島内の中学から京都の私立高校に進学し、大学までは京都で過ごし、メーカーへの就職で東京、結婚後はアメリカ駐在も経験し、帰国後は東京、名古屋、大阪で暮らした。

団塊世代の男性も大学進学以降あまりテレビを見ていなかった。大畠町出身のDさんは大学生生活を北九州で送り、昭和45（1970）年に東京で就職した。大学時代の下宿にはテレビがなく、3年生になって先輩から古い白黒テレビをもらったが競馬中継を見た記憶しかない。東京で就職して32歳までは社員寮生活を送ったが、退寮するまでテレビは持たなかった。東京の大学に1966年に進学したEさんも学生時代にはテレビがなかった。地方出身男性が1960年代後半から70年代前半期にはテレビ娯楽と縁遠かった様子が窺える。

ただし、職場のテレビでニュースなどを見ていた話も出た。「仕事をしているからテレビを見ない」とはいえ、「銀行のロビーのテレビが3時以降もついていた」「抜け出して会社のあるビルの喫茶店で」「二日酔いで休んだときに寮で」などの発言からは、「テレビを見ない」という語りが「家でゆっくりテレビを見ることはない」という意味であることが推測できる。

(3) テレビ以外の娯楽経験

男性にはテレビ以外の娯楽があり、一般に「テレビしかない」状態だった育児・家事専業主婦とは異なっているが、娯楽の質や量には男性の中でも地域・世代による相違がみられる。またテレビを見る時間がなかったと語った男性たちのすべてが、仕事だけに追われていたわけではなく、男だけでの飲酒や遊びで忙しかった様子も浮かびあがった。

戦争世代の元教員のAさんは「テレビを見る間もなかった」と語っていたが、一方では宿直の日には農作業から解放され教員仲間との麻雀を楽しんでもいた。また自宅通勤が難しい僻地勤務のときには単身で赴任し、教員住宅でほぼ毎日同僚や地元の男性らと麻雀をした。農業との兼業で家族といると遊べなかったが、職住分離の単身生活がAさんに娯楽をもたらした。

Aさんと同年齢のBさんによると、青年期には地域の伝統的な行事や青年団の活動が盛んで、若い男性たちは酒を媒介にして連帯していた。軍隊生活の経験を仲間同士で思い出話として語りあうことは今も楽しみであるという。

— (Bさん)「昔は遊ぶとこがない。若い人がずーっとあこのとこの会館あつまりよった。平郡（島）から、芋焼酎を、ヤミよ、密造酒を造って、うまいこと手に入るのよ。『オーイ、入ったぞ』『おい行くぞ』って、男、ざーっと集まる」

とはいえこれら戦争世代は後の世代に比べ娯楽経験が乏しい。EDさん（81

歳元教員)は「私の頃は貧困の時代」という。KWさん(80歳,元建設会社勤務。現在農業)は「別に,こりゃ楽しかったことっていったら,ないな」と述べ,楽しみとしては1合の晩酌,強いて言えばと雨で仕事がないときのパチンコを挙げた。またバス運転手だったKRさんの唯一の楽しみは若い時に職場の先輩に勧められた喫煙である。KWさん, KRさんは2人とも現役時代にはテレビもあまり見ていない。

「テレビより映画中心」の青春だったのは第1戦後世代と団塊世代である。OKさん(75歳,農業)やIKさん(75歳,元銀行勤務),IMさん(64歳,元会社員)は高校時代から船で本土側に渡り,柳井市や岩国市の映画館で洋画や邦画を見た。小松屋代地区にも劇場兼映画館ができて邦画を上映した。第1戦後世代・団塊世代の男性たちからは,「慕情」「風と共に去りぬ」「シェルブールの雨傘」「十戒」といった洋画のタイトルが次々にあがった。

CさんやDさんは都市に進学した後も映画は見ている。Cさんは京都で2本立て,3本立ての映画館で西部劇を中心に洋画をよく見た。大学紛争期に北九州にいたDさんもアクション映画や東映の「やくざ映画」を多く見た。

さらに就職後に経験した仕事と一体化したいいわゆる「企業接待」にも娯楽としての側面が色濃かった。Cさんはメーカーの海外営業部に所属して「遊び仕事」(Cさんの表現)を経験した。Cさんほどではないが,首都圏の企業に勤務した団塊世代男性Dさんも勤務時間以外での男同士の麻雀や飲酒を楽しんだ。オイルショック後も接待は続いた。日本経済における比較的優位な立場を職業生活の中で体感していた人びとにとって,仕事にまつわる楽しさが非常に大きかったといえよう。

—(Cさん)「若い頃から銀座に入り浸っていた。いい時代ですよ。接待ですね,食事をしてバー,タクシー券」「銀座のお姉さんはすごい勉強しているんですよ。だからそらさないし,話あわせてくれるし勉強にはなるしで,面白かったですよ」

—(Dさん)「正直に言えば,社会のことにあまり関心がなかったんだろう。遊びと仕事だけ。僕らの世代はあの頃は仕事で目いっぱい。夜は酒飲むか麻雀」

(4) 結婚生活とテレビの強い結びつき

結婚前は仕事と遊び中心だった男性も,結婚時には「当然のこと」としてテレビを購入し,また結婚すると帰宅時間が早まりテレビを見た。職場結婚したCさんの場合,妻は結婚退職し3人の子どもを育てた。Dさんも職場結婚しており結婚後1,2年は早く帰宅してテレビをみた。「結婚=家で時間を過ごす

こと＝テレビを見る生活であること」は彼らにとって自明視されている。

— (Cさん)「結婚してから後はね、とにかく帰ってから寝るまでの間はテレビがついていた。なにかは見ていたですね。毎日毎日そう話すこともないでしょう」。

— (Dさん)「やることないからテレビ見る。ドラマ…は見ない。プロ野球、スポーツ、ゴルフも見る。生活なんだよね。あまり会話もないからおるときはテレビ。それからはずーっと」「土日は野球と、大体普通のサラリーマンと同じで、ゴルフ、ボクシング」。

夫婦でテレビを見る利点は何だったのだろうか。Cさんは夫婦の間に共通の価値観をもたらず装置としてテレビを位置付けていた。

— (Cさん)「これはね、結果論ですけどね、夫婦が共有する価値基準ってあるじゃないですか。そういうものを、あれやれこれやれったら絶対だめなんだけど、なんとなく亭主が見ているものとか、話していることからお互いにシンクロする部分が出てくるんですよ。それにはテレビというのはいいですよ」

(5) 勸善懲悪型時代劇への好感とホームドラマとの距離

男性は女性ほどテレビドラマを好まないとはいうものの、戦争世代も第1戦後世代も「水戸黄門」を筆頭に時代劇を好んで見ている。82歳のBさんはインタビュー場所に長い竹の棒を杖にして歩いてきた。「黄門さま」の真似である。放送開始時からのファンだという。リハビリのために通院する病院でも「黄門さん」と呼ばれている。

— (Bさん)「わしは決まって黄門さまは見るの。4時から。火曜日かね、夜8時からもある。黄門さんは絶対見る」。

周防大島町でのグループ・インタビューでも時代劇が話題になると話が弾んだ。

— 「必殺なんとかとかね、水戸黄門とか」「そうなんです。水戸黄門がわたしはいい」「いつ見てもね、どっから見てもええようなもんです」「今の世の中で足りないのは『正義は必ず勝つ』っていう、西部劇のね、というのがなさすぎるよね、小汚く、ずるい奴がうまいことやってるな、っていうのが世の中多すぎるよね」「筋は同じやけどね、やっぱり人間としてね、どうあるべきか。今は、今の日本には水戸黄門みたいな人が必要なんよ」

現在でも夕方3時56分からの「水戸黄門」の放送時間になると、各種の会合が成立しにくいほどこの番組を視聴している人が多いという。配役や一話ごとのストーリーは重要ではなく、内容面では正義が必ず勝つという勸善懲悪、形式面では途中から見ても展開が読める物語構造のパターン化と一話完結型が好

まれる理由に挙げられた。

一話完結を好み、連続ドラマを好まない理由を、サラリーマンとしての現役時代の生活時間の不規則さに求める男性もいたが、時間的拘束をきらう女性の発言もあった。

— (Cさん)「(勤めているときには)きちっと決まった番組が見れないんですよね。大河ドラマなんか苦手なのはその当時の後遺症なんだけれども。決まって毎週何を見るっていうのができなくて、たまたま時間があるときにおもしろそうだったら見てっていう感じですね」

— (Xさん75歳女性)「ドラマなんかでも見ればいいんでしょうけれど、今日は何曜日だからあれ見なければいけないと言うのがあるから。それに縛られたくないのね。あんまり私ドラマ見てないのよ」

ホームドラマについては否定的な意見があった。柳井市生まれのKMさん(55歳男性会社員)の亡くなった父親はNHKのホームドラマ「バス通り裏」が大嫌いだった。KMさんはその理由を「墮落した、アットホームな」「いわゆる実感のない、生活感のないドラマ。舞台が東京の話ですからね」と説明した。団塊世代のEさんも子どもの頃、東京を舞台にしたホームドラマ(「ママちょっときて」など)に違和感を覚えていた。自分の家とはかけ離れた生活描写(部屋の様子、言葉づかい、家族の関係性など)に現実感がなく、全く楽しめなかった。成人後も「女と男がくっついたり離れたり、嫁舅がもめたりといった面倒な人間関係のどこがおもしろいのか」と感じている。

同じく団塊世代のDさんもテレビドラマには否定的意見をもつ。Dさんは人情家で「なにしろ、みんなに笑われたのは、独身寮で『みなしごハッチ』見て泣いちゃったのよ」という一面もある男性だ。

— (Dさん)「一人の人間が筋書きを決めて、それに涙を流すのは耐えられない。何で、人が考えた話に俺が涙流したりしなきゃならないのか」「NHKのドラマはまだいいが民放のドラマはなんか恥ずかしい。大衆迎合というの、見る側を笑わしてやろう、泣かせてやろうが激しい」

感情を揺さぶられることを否定しているというより、情動が映画ではなくテレビ演出によって左右されることにたいする拒否感である。

Dさん、Eさんのテレビドラマへの反発は、同じ団塊世代の女性Yさんのドラマへの好意的な態度とは大きく異なる。

— (Yさん61歳女性)「ドラマなど、テレビである程度の常識が身に付くでしょう。挨拶とか。私はテレビに釘付けだったから。いまいろいろなことがわかるのもテレビのおかげかな — と思う」

(6) 老後生活とテレビ — テレビを見ない「男の意地」

高齢期には男女ともにテレビを長時間見るようになることは知られている(齋藤2008a,b, 田口2004)。退職後は男性も現役時代とは違って自分の自由になる時間が増えるからだ。戦争世代のAさんも「テレビを見るようになったのは定年後」と語り、相撲や野球、ドラマでは「水戸黄門」「チャングムの誓い」を好んでいた。だがこの地方の高齢者たちにとって老後の生活におけるテレビ娯楽はかならずしも肯定的に位置付けられてはいない。

I Kさん(75歳 元銀行勤務)は退職後も規則的な生活を送り、時間帯を決めてテレビを見ている。テレビが自分の生活時間を乱すことを気にしており、本を読むときにはテレビを切り、気分を切り替えるために別の部屋に移動する。日曜日のNHK大河ドラマは必ず見るが8時からの放送ではなく6時からのハイビジョン放送で見る。「夜はできるだけ見ない」ために、日課の散歩の時間を早めて調整する。だが調整はそう簡単ではない。「時間を自分でコントロールするというのも、じゃ今テレビを家からなくして生活できるかといえ、それはできんですね、私は。さみしい」。自分を生活の主体としてテレビに生活時間を支配されないよう計画的に利用したいが、その一方でテレビなしにはさびしくて生活できないというジレンマを感じている。

目前に退職を控えている団塊世代のDさんの語りには、テレビのある定年後の生活についてのより深い葛藤があらわれている。

— (Dさん)「テレビを見て老後を送りたくない。そんな楽な楽しみではないものが自分にはあるはずだ、という思いがある。それを求めなきゃいかん、と。いざとなるとそれが意外とない。自分は何が得意で何ができるか模索している。テレビは最低保障、いちばん最後」。

テレビに依存した老後生活になりたくない、という強い思いと、そうになってしまうかもしれないとの不安が同居している。「テレビを見るしかない生活」はあるべき姿ではなく、そうなることは男性としてのアイデンティティを脅かすものである、という思いがあるのだ。「テレビを見る生活」を嫌う理由をDさんは以下のように分析している。

— (Dさん)「僕らの時代、高校の頃はテレビを見るのはバカだった。そういう風潮の中で若い時期を過ごしてきた。ほとんどの年寄りにはテレビが友達だと思ふよ。ほくらの年代はテレビに反発する世代」『『テレビなんか見る暇なかった』とか、テレビを見ていることを隠したがる、男にはそういうところもあるね。『テレビを見るしかない生活だ』と思われたくない……できるだけ本を読むようにしているが、本当に読みたいのかどうかかわらないとこある」。

3. まとめと考察 — 「テレビを見ない」男性と「おんな、子ども」のテレビ

村松 (1983) が述べたと同様に、女性は生活をさまざまな意味で豊かにする重要な道具のひとつとして、テレビを使いこなしている面がある (国広・大坪 2009)。

では男性たちにとってテレビはどのようなものか。女性たちに比べると男性たちにはテレビ娯楽を軽視し、反発したり、抵抗する様子が見られた。とくに老後はテレビに依存しない生活を送ろうとする様子があった。その背景を考察する。

3-1 「テレビを見ない・見ていない」と男性が語る意味

旧大島町地域の戦争世代は質素儉約を旨として働き、子どもが島外で職業を得て働けるように高等教育を受けさせることを優先してきた。島内の勤め先は、役場、学校、郵便局、農協に限定され、就職先を島外に求めざるを得ないからである。男性は全体的に「仕事に就いていたのでテレビは見ていない」と述べる傾向があったが、なかでももっとも「テレビを見ていない」のは、テレビをみる時間がなかったほど働いた戦争世代、とりわけ、子どもである団塊世代に高い教育を受けさせ、都市に送り出した兼業農家のサラリーマンたちだった。一般には農漁村地域として把握される旧大島地域であるが、高度経済成長期には地域の内にジェンダー分業型ライフスタイルに移行した都市型の核家族と農業兼業・専業の伝統的家族が混在し、後者において特に男性の労働時間が長かった様子である。

戦争世代にとってテレビは「子どものため」に購入した副次的娯楽メディアであった。Bさんのようなジェンダー分業型の勤め人世帯では、平日日中のテレビが「おんな・子どものもの」だったとしても、男性の帰宅後や休日は「男性のもの」になりえたが、兼業農家の男性にはテレビ娯楽を楽しむ機会のごく限られた。今回の調査対象には兼業農家の戦争世代男性が3名いたが、この人たちが「テレビは見なかった」と語る時、彼らにとっての「テレビを見る生活」とは時間的・経済的に余裕のある生活を意味した。この3名に限らず、男性たちにとってテレビ視聴は「働かない時間＝余暇」の存在を意味し、「働かない＝怠惰」につながるテレビ視聴は肯定的には語りにくいことのようにだ。

また産業構造の変化で徐々に農業の重要性が低下し農家の兼業化が進んだ際、「企業戦士」としての雇用労働と農業とを共に担い「テレビを見る間もない」生活を送った戦争世代の男性にとって、「テレビをみる間もない」ほど働いたことは誇りであり、アイデンティティとして重要な意味があることも考慮する必要がある。

またこの地域に限らず、ジェンダー分業規範が男性に稼ぎ手役割を求めた高度経済成長期に「テレビを見ない」存在であったことは、男性としての威信を保つうえで今も重要性をもつと思われる。第1戦後世代や団塊世代にもその傾向があることはCさんDさんなどの発言からもうかがえた。

3-2 男性の娯楽におけるテレビの重要度の低さ

生活における娯楽経験の種類や量の少なさはこの地域在住の戦争世代の高齢男性に共通している。彼らの中には演劇、演奏会での音楽鑑賞経験や相撲やプロ野球試合などを見た経験のない人もいた。しかし、ほぼ大島地域内で生活していた戦争世代の男性にとって、若い時期における青年団や軍隊などでの「男同士の絆(ホモソーシャルな欲望)」(Sedgwick 1985 = 2001)を充たす経験が妻や家族との娯楽に増して重要性をもっていたことがうかがえる。Aさんの例では結婚後は男だけであるゲームとしての麻雀が唯一の娯楽であった。娯楽経験に多様性がない点では、学生時代にやくざ映画やアクション映画を好み、成人後は麻雀と飲酒を娯楽の中心に据えた団塊世代のDさんにも共通点がある。第1戦後世代にはテレビの初期に電気店などで共同視聴したプロレスや野球の記憶が強く残るが、これもスポーツ視聴を通して男性間の連帯意識を強めた経験といえるだろう。

全体に家庭でのテレビは妻と共同視聴するものとして語られるが、男性自身の娯楽としての重要性は与えられていない。男性たちは自分あまり見ないテレビを妻がよく見ており、妻にとってはテレビが必要かつ重要なメディアであると認めているが、テレビで妻が得る娯楽やそれを通じて得る知識を軽視する傾向がある。

3-3 時代劇志向とホームドラマへの反発を支える価値観

ドラマで好まれるのは時代劇で、とくに再放送を含めて放送頻度の高い「水戸黄門」である。年長者と若者2人が主人公の男のドラマとして構成がパターン化され、勧善懲悪で「正義が勝つ」点が高く評価された。「正義が勝つ」のはテレビ初期の西部劇やプロレスでも同様だったとして懐かしみ、悪がはびこる現実社会への怒りも語られた。過疎化・超高齢化し、孫や子どもとも頻繁には会えない孤独感や財政も逼迫して明るい展望ももてない地方社会での“取り残され感”を乗り越えようとする地方の高齢男性にとって、テレビは、彼らがよりどころとできる娯楽として、時代劇の「正義」しか提示しえていないと考える必要もあろう。

キャラクター設定が複雑で善悪の判断がつきにくく、結末も予測できないような、男女関係や家族関係を描く連続ドラマはここでは好まれない。ホームドラマ

が描く都会生活が、この地方出身者やここで暮らす高齢男性にとって、相変わらず距離感が大きい内容なのである。

旧大島町沖浦地区で子ども時代を過ごしたEさんは、高度経済成長期のジェンダー分業型家族を理想化して描いた「ママちょっと来て」に現実感がもてなかったと語っている。その違和感は、農家で母・祖母も共に忙しく働く姿を当然のこととして見てきたために抱いた、都市型家族のジェンダー役割分担への抵抗感だったかもしれない。Eさんは大学からは東京に出て就職・結婚した際、ジェンダー分業型家族を形成することもあり得た。しかし実際には共働きを続け、現在は親の介護のために自分だけが帰郷している。老親のために自分だけが帰郷しているのはDさんも同様で、それぞれの妻は共に首都圏で就労している。Eさんにとって、ホームドラマが当たり前のように描いてきた都市型家族の生活は時代劇よりもなじみの薄いものだった。時代劇が描く男性性に同調する意識と、都市型家族のジェンダー役割分担への違和感が並存していたことについては、さらに検討する必要がある。

この地域では婚姻相手の選択に地域性を重視する伝統的な価値観は根強く、子どもが親の世話をすることを当然と考えているため島内や県内同士の結婚が好まれる。だが、「男は仕事・女は家庭」といった単純化したジェンダー分業はみられない。働くことは老若男女にとって当たり前で、時間があれば畑を借りて野菜を栽培する。こうした質素節約や生活の計画性を重んじるエートスは、テレビ・オーディエンスとしての意識にも反映し、老後を迎えた第一戦後世代もテレビ娯楽によって勤勉な生活が乱されることを警戒しながらテレビと折り合って生活していた。テレビ娯楽への用心深さの裏に、この地域社会に受け継がれる質素節約勤勉の精神をみることも必要だろう。

3-4 団塊世代男性のテレビ経験の少なさと男性的生き方へのこだわり

戦後この地方出身者のライフスタイルは大きく変化した。高学歴化、農業の衰退、現金収入の価値の上昇に伴う都市への進学・就職者の増加である。第1戦後世代、団塊世代には進学や就職のありようにジェンダーによる違いがあり、それがテレビ経験の違いにも繋がった。女性の場合、基本的には親元から通学・就職し、地元の男性と結婚し、家事・育児・介護を担った。その場合、テレビとは関係は途切れない。都会に進学したのは経済的条件に恵まれた家の女性に限られた。例えばYさんの場合、事業家の親は女子寮があることを理由に東京の女子大をYさんの進学先を選んでいる。寮にはテレビが備えられていた。Yさんは卒業後1年ほど就職した後、同地域出身の首都圏在住のサラリーマンと見合い結婚、その際にテレビを購入したので彼女の人生で生活の中にテレビがなかったのは幼

い頃の短い時期だけだ。

一方、男性の場合は親が経済的に相当無理をしても都会の大学に進学させることが多かった。DさんとEさんに典型的にみられるように、彼らは学生時代にはテレビを持たず、また見てもいない。テレビを見なかったことを主体的選択とみなして語る傾向があるが、むしろ物理的な理由（テレビそのものがない、時間がない）である。反体制運動やサブカルチャーが盛んだった時期に青年期を過ごしたため、テレビを大衆娯楽の代表とみなして軽蔑した面もある。またテレビドラマとくにホームドラマを軽視する語りになるのは、内と外を区別したうえで外を重視し、家族内の出来事は女性に任せるといった内面化した男性優位意識によるものだろう。

この地域では、長男が親の後を継ぐことが当然視されている。したがって都会に出た長男はUターンを意識し、都市定住者としてのアイデンティティを持ってないまま過ごしてきた。しかし、都会生活が長いので「田舎の年寄り」（ステレオタイプ化されたテレビ依存の高齢者像）にもなりえない。テレビドラマが描く都市生活やそこでの愛情関係を描くドラマに違和感をもちつつ、「田舎の文化」（イメージ化されているに過ぎない）を否定するという文化的な宙づり状態を続けてきたのではないだろうか。

Dさんが「テレビを見ない」のは、従来は仕事を中心に生活時間が配分されてきたからであり、現役時代は仕事がアイデンティティを充たしていた。退職で空白になる時間をテレビではない「何か」で充たさなければ「男」ではなくなるという感覚はおそらくDさん独自のものではなく、退職を控えた多くの男性が共有するものであろう。テレビを軽視するテレビ・オーディエンスであることがDさんのようなサラリーマン男性のアイデンティティであったからである。

4. 結び

本稿では山口県南東部出身男性のテレビをめぐる生活史を彼らの語りをもとに検討した。瀬戸内海に浮かぶ周防大島町だけでなく本州側にある柳井市でも、フジテレビ系列のいわゆるトレンド・ドラマは2009年時点では放送されていない。テレビが日本文化を均質化した面もたしかにあるが、国内のメディア・スケープも重層的である。さらにテレビ経験には、広域的にみればひとくりにみなされる同じ地方の中でも、地理的状況、経済的状況、個人の就業形態などによって違いがあり、都市—地方という二元的な把握の仕方ではとらえきれない面があることが分かった。山口県南東部地域内では柳井市—周防大島町、周防大島町内では小松屋代地区—沖浦地区、沖浦地区内では海辺の地区—難視聴

の山間部というように、ローカルの中にさらにローカルを作り出す形で多層的にテレビは経験されており、テレビ視聴を地政学的に検討することの重要性を確認した (Appadurai 1996 = 2004)。

また女性と男性の生活時間と生活の場がジェンダーによって配分されたために、オーディエンスがジェンダーによって区分され、テレビが「おんな、子どものもの」として、つまり「男は見ない」ものとして受容されていった様子も確認できた。

家父長制と怠けてはいけないという労働を重んずる規範が合体し、「働いて稼ぎ家族を養う」ことが男性にとってもっとも重要な役割となった高度経済成長期とその後の日本社会を「男として」生き抜くうえでは、この地方に住み続けた男性にも、またこの地方から大都市に出た男性にとっても、テレビ娯楽はさほど重要な位置を占めなかった。家庭の外の男中心社会には、男のための娯楽がそれなりに用意されていた。それは家族のケア役割のために家に待機するのが役目とされ、家に存在するテレビとの接触時間が長かった女性とは対照的である。

だが、「定年後」には男性のライフスタイルは一変する。本稿の団塊世代男性のテレビをめぐる語りには、重要ではなかったはずのテレビがにわかに重要性を帯びてしまう定年後の生活への不安が表されていた。女性であるYさんが「ハイビジョンで『いい番組』を見る。世界遺産、ガーデニング、農業関係、海外ニュース・・・」と老後もテレビを選択的に視聴して「生活をゆたかに」しようとしているのに比べると、男性であるDさんは退職後の「生活に意味を見出す」ために、テレビという存在と戦い、乗り越えようとしていた。しかし『『テレビなんか見る暇なかった』とテレビをみていることを隠したがるところが男にはある」というDさんの語りは、男性性に拘束されたテレビとの屈折した関係を見直す契機を内包している。男性がテレビを娯楽のツールとして気楽に活用し始めるならば、団塊世代の老後は、女性のテレビ視聴が男性に近づいていく方向ではなく、男性のテレビ視聴が女性に近づく方向でジェンダー・ギャップ解消へと向かうことも考えうるのである。

年長男性には口数が少ない人が多く、テレビ・オーディエンスとしての男性研究、とくに生活史におけるテレビ視聴のインタビュー調査を進めるには、信頼関係を結ぶまでの時間が必要である。同じ地域に長期にわたって繰り返し通い、さまざまな好意と出会いに恵まれてこの研究が可能になったが、まだ対象数も少ない。また男性が好む番組ジャンル(スポーツ)や男女が共によく視聴しているニュース番組の視聴態度のジェンダーによる相違の有無など検討を要する課題も多い。探索的研究として今後もさらに継続したい。

(くにひろ ようこ 東京女子大学)

〔注〕

- (1) 大学卒の初任給が8000円の時期に17インチのアメリカ製受信機が25万円だった（佐藤1998 p220）
- (2) 「団塊の世代」とは、狭義には1947から49年の3年間の戦後ベビーブーム期に生まれた約800万人の戦後世代であり、2009年時点で60歳から62歳の層を指す。人口規模が大きいため、その動向が戦後史においてさまざまに注目されてきた。テレビ普及と関連させると、普及期の1960年前後は小学生、東京オリンピック（1964）には高校生、1970年前後には大学進学者を含み社会人となっていた人々たちである。本稿ではこの「団塊の世代」と「団塊世代」を区別して用い、団塊世代は「団塊の世代」を含む1944-54年生まれとする（注4も参照）
- (3) 「三種の神器」（洗濯機・冷蔵庫・掃除機）がマスコミによって流行語になるのが1956年。61年には洗濯機・白黒テレビの普及率が人口5万以上の都市部で5割をこえ、白黒テレビが掃除機にかわって「三種の神器」に加わった。白黒テレビは61年中に都市部62.5%、農村部でも48.9%普及。（山崎2001p.89）
- (4) 河野啓（2008）は、1973年から5年ごとに実施されたNHK時系列全国調査「日本人の意識」の2003年までの統計データを用いて類似する生年グループをまとめて区分けし、6つの世代グループを析出し、30年を経ても世代内の意識には大きな変化がなく「各世代の若い頃に形成された考え方が構造上そう変わるものではない」ことを見出した（河野2008p.14-38）。河野による世代を適用すると本調査の調査対象は、「戦争世代（1928年以前生まれ）」「第1戦後世代（1929-43年生まれ）」「団塊世代（1944-54年生まれ）」に該当する。そこで以下ではこの世代区分を用いて記述する。「団塊世代」は狭義の「団塊の世代」前後をより幅広く含んでいる。
- (5) 研究プロジェクト名「記憶の共有と風化——テレビの社会的役割の変化」（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所 代表萩原滋）による全国調査。サンプル数1600、10代から60代の男女対象。
- (6) 本調査は2008年度には武蔵とメディア研究会2008年度研究プロジェクトとして武蔵大学総合研究所助成より受け、共同研究者大坪寛子と実施した。報告書は国広・大坪（2009）。2009年は放送文化基金の助成を受けている。
- (7) 大島と同じく山口県の瀬戸内海にある平郡島。Bさんの住む沖浦H地区の対岸にあり、船で行き来する。
- (8) 先祖代々の墓に入れるのは長男とその家族だけである。家や土地も他のきょうだいは分配せず長男が継ぐ（Yさんからの聞き取り）。現在のこの地区の在住者（Uターン者を含む）あるいは頻繁に帰郷する男性はほとんどが長男である。

〔引用・参考文献〕

- 阿部恒久・大日方純夫・天野正子 2006『男性史3「男らしさ」の現代史』日本経済評論社
- 天野正子編著 2001『団塊世代・新論——（関係の自立）を開く』有信堂高文社
- Appadurai, Arjun 1996 "Modernity at Large: Culultural Dimensions of globalization" (= 2004) 門田健一訳『さまよえる近代』平凡社
- 浅井春夫・伊藤悟・村瀬幸浩編 2001『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』十月舎
- 井上輝子 2009「メディアが女性をつくる？女性がメディアをつくる？」『新編 日本のフェミニズム7 表現とメディア7』p.1-36
- 伊豫田康弘 ほか1998『改訂増補版テレビ史ハンドブック』自由国民社
- 河津孝宏 2009『彼女たちの「Sex And The City」——海外ドラマ視聴のエスノグラフィ』

せりか書房

- 河津孝宏 2008 「『私』を語るテレビ視聴 — 海外ドラマ『Sex and the City』の生活史的実践」日本コミュニケーション学会・日本新聞学会編『マスコミュニケーション研究』第72号 p.59-77
- 河野啓 2008 「現代日本の世代 — その析出と特質」NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』 p.14-38
- 国広陽子・大坪寛子 2009 「テレビとは何だったか — 記憶される娯楽としてのテレビ —」武蔵大学総合研究所武蔵メディアと社会研究会
- Mosse, L.George 1996 “The Image of Man;The Creation of Modern Masculinity” (=2005) 細谷実・小玉亮子・海妻徑子訳『男のイメージ — 男性性の創造と近代社会』作品社
- 村松泰子 1983 「女性はほんとうにテレビ好きか」NHK放送世論調査所編1983『テレビ視聴の30年』日本放送出版協会 p.246-267
- 内閣府 2009 『平成21年版男女共同参画白書』佐伯印刷株式会社
- 落合恵美子 2008 「近代家族は終焉したか — 調査結果が見せたものと隠したもの」NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』日本放送出版協会 p.39-58
- 大島町役場 2003 『続周防大島町誌』
- 大島町役場 1994 『周防大島町誌 復刻版』
- 齋藤健作 2008a 「高齢者のテレビ視聴 (上)」『放送研究と調査』NHK放送文化研究所2008年9月号 p.2-15
- 齋藤健作 2008b 「高齢者のテレビ視聴 (下)」『放送研究と調査』NHK放送文化研究所2008年10月号 p.66-79
- 佐藤卓己 1998 『現代メディア史』岩波書店
- Sedgwick, Eve Kosofsky 1985 “Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire” (=2001) 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆』名古屋大学出版会
- 関口久志 2001 「体育・スポーツにおける『男らしさ』 — 現代から未来へ」浅井春夫・伊藤悟・村瀬幸浩編『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』十月舎 p.72-97
- 瀬尾徹志 2001 「マスメディアにみる男性像」浅井春夫・伊藤悟・村瀬幸浩編『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』十月舎 p.150-169
- 白石信子 2003 「生活で変わるテレビの見方~男女や年齢などで異なるテレビ視聴」NHK放送文化研究所2003『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会 p.164-181
- 田口恵一 2004 「70歳代・80歳代の高齢者はどのようにドラマを見ているか?」『放送研究と調査』2004年10月号 p.66-75
- 田中義久・小川文弥編 2005 『テレビと日本人』新曜社
- 山崎哲哉 2001 「団塊男性のジェンダー意識」天野正子編著『団塊世代・新論』有信堂 p.85-146

Men as TV Audiences

— Using the Life History Approach in the Eastern Area
of Yamaguchi Prefecture.

KUNIHURO Yoko

(Tokyo Woman's Christian University)

More than half a century has passed since 1953 when TV broadcasting started in Japan. Men as TV audiences have not been fully studied yet although gender analyses of TV program using the content analysis method, as well as the study of women as TV audiences have been carried out.

Women tend to watch TV longer than men and they tend to prefer dramas. On the other hand men tend to prefer sports programs. Such tendencies have continued for relatively long periods.

So what is the purpose of this paper? In this thesis, I have tried to clarify the grounds for the differences in TV program preference between men and women that have been structuralized by gender by using the approach of listening to life history of men. Interviewees were men aged 61 or older from the eastern area of Yamaguchi prefecture.

From their narrations, they were shown to have attitudes such as “not wanting to watch TV” and/or “not watching dramas”. Those attitudes are supported by the fact that they believed men have to work honestly, and TV entertainments should not invade daily life. This belief is shared commonly among aged people in this area.

It can be said that such beliefs and time allocation by gender role have structuralized attitude towards TV by gender; such as watching TV is for women and children. Moreover, it was also found that men in this area spend their leisure time drinking alcohol and playing mah-jong rather than watching TV, and that men prefer samurai dramas which depict male solidarity.

Key Words: TV audiences, gender-gap, life history, TV dramas